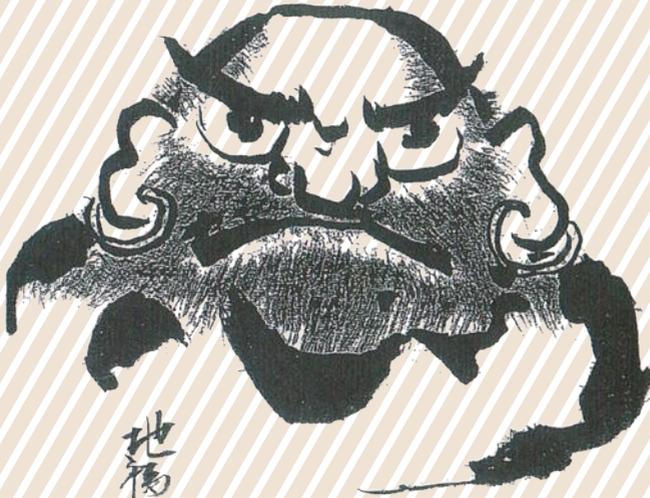


地福寺出開帳
兩國回向院
復幸支縁基金
ご報告

あけがた
いよいよ
しげな



地福寺


目次

ご挨拶	1
地福寺出開帳 両国回向院について	2
助成事業一覧	3
助成事業紹介	4～21

支援分野

メンタルヘルスケア 震災やその後の避難生活でストレスや心の不調を抱える方への支援
専門職によるカウンセリングや定期的な見守りなど

グリーフケア 震災により大切な人を亡くした方の喪失に関する支援
専門職によるカウンセリングや分かち合いの会の開催など

子ども・子育て支援 子どもや子育てを行う保護者への支援
子どもの遊び場づくりや妊産婦支援、母親の子育て相談など

社会的弱者支援 障がい者や高齢者、ひとり親世帯などへの支援
就労や生活のサポート、居場所づくりなど

ご挨拶

回向院は、「地福寺出開帳 両国回向院 復幸支縁基金」を設立し、東日本大震災で被災された東北の方々の心の平穩に寄与する事業に資金助成を行ってまいりました。

東日本大震災で被災された方々を対象とした、①メンタルヘルスケア、②グリーフケア、③子ども・子育て支援、④社会的弱者（障がい者・高齢者・ひとり親世帯・生活困窮者・外国人等）支援の事業を対象に、18の事業に資金を助成しました。助成させていただいた皆さんは、弱い立場におかれている人々の声に丁寧に耳を傾けてサポートする事業・団体ばかりで、そのお取り組みには本当に頭が下がります。

2015年6月に宮城県気仙沼市に挨拶に伺った際には、ご自身も被災しながら地域の子どものための遊び場を続けていらっしゃる方、昼間は別の仕事をしながら流出した故郷の記憶を集めている方に、たくさんの大切な話を伺うことができました。こういった方々が東北の被災地で頑張っておられる様子をお伝えすることも本基金の役割と考えています。

本報告書では、助成を受けて活動した団体や活動内容をご報告しながら、震災から5年が経過した東北の現状や団体の皆さんが抱えている課題をお伝えします。震災の記憶の風化が進むなか、東北の被災地で子どもやお年寄りのために活動している方々がいらっしゃることを知っていただく一助になれば幸いです。

回向院

東日本大震災 復“幸”支“縁”地福寺出開帳 両国回向院

「地福寺出開帳 両国回向院 復幸支縁基金」は、2014年11月8日から24日にかけて、回向院にて行われた「東日本大震災 復“幸”支“縁”地福寺出開帳 両国回向院」での、皆さまからいただいた浄財を原資しております。

「東日本大震災 復“幸”支“縁”地福寺出開帳 両国回向院」は、東日本大震災で亡くなられた方々のご供養と被災地の復興を祈念し、宮城県気仙沼市・地福寺ご本尊「延命地藏菩薩」に東京までお越しいただき開催いたしました。出開帳は、遠方でありなかなかお参りできない寺社仏閣の秘仏等を東京（江戸）でも拝めるよう、秘仏等仏さまに東京（江戸）までお越しいただく行事であり、回向院を中心に江戸時代より大きな賑わいを創出した催しです。

地福寺は、宮城県気仙沼市波路上に位置し、東日本大震災で津波にのまれました。同寺は、明治29年6月にも三陸大津波の被害を受け、壊滅状態となった地であり、あの日、再び大きな被害を受けました。九死に一生を得た片山秀光住職は「多くの方がこの地を去るかもしれないが、寺が残って頑張らないと、離れた人が戻ってくる場所、心の故郷がなくなる」と語ります。合言葉は「めげない にげない くじけない」の合言葉は、片山住職が避難所となっていた階上中学校の体育館に掲げた被災者を励ます言葉です。



(助成事業一覧)

(助成額/円)

1	気仙沼あそびーばー「大人のカッコイイとこ見せちゃうぞ！」 団体：気仙沼あそびーばーの会【気仙沼市】	500,000-
2	震災復興「語り部」育成・視察事 団体：一般社団法人 気仙沼観光コンベンション協会【気仙沼市】	250,000-
3	「みんな はまろう！」リフレッシュ研修会！ 団体：赤岩児童館 子育てネットあかいわ【気仙沼市】	180,000-
4	被災者の見守り・医療・移動支援事業 団体：ムラカミサポート【気仙沼市】	500,000-
5	子育て家族の交流事業 団体：子育てネットワーク Kesenumama'S【気仙沼市】	500,000-
6	地域みんなで浜わらす！ 団体：特定非営利活動法人 浜わらす【気仙沼市】	500,000-
7	記録誌「忘れない」作成・配布 団体：東日本大震災杉の下遺族会【気仙沼市】	500,000-
8	教育の現場で生と死に向き合うために2015 団体：特定非営利活動法人 仙台グリーンフケア研究会【仙台市】	500,000-
9	広い世界を体験して、自立へ向けて一歩を踏み出そう！ 団体：特定非営利活動法人 奏海の杜【南三陸町、気仙沼市、登米市】	500,000-
10	"被災者同士の「声かけ・助け合い力」養成セミナー ～身近な人々・大切な人々のSOSサインに気づくコミュニケーション術～" 団体：公益社団法人 日本駆け込み寺 仙台支部【岩手県、宮城県、福島県】	500,000-
11	"網地島ふるさと楽好～被災地の児童養護施設の子どもたちを笑顔に～" 団体：網地島ふるさと楽好【石巻市】	500,000-
12	南三陸ママサークルもこもこ 団体：南三陸ママサークル もこもこ【南三陸町】	300,000-
13	「学びと暮らしへの安心感をはぐくむ防災学習」推進プロジェクト 団体：一般社団法人 コミュニティ・4・チルドレン【宮城県内】	500,000-
14	震災4年目のおしゃべりサロン・発達障害児の子育てと保護者支援 団体：特定非営利活動法人 みやぎ発達障害サポートネット【仙台市】	270,000-
15	震災復興支援室こころの杜事業 団体：一般財団法人 仙台YWCA【仙台市】	200,000-
16	子どもの権利を守るための未成年後見活動を推進する事業 団体：特定非営利活動法人 ワンファミリー仙台【仙台市】	500,000-
17	福島グリーンプログラム 団体：特定非営利活動法人 子どもグリーンサポートステーション【福島市】	500,000-
18	ふくしま笑顔子育て広場 団体：特定非営利活動法人 しんぐるまざあず・ふぉーらむ・福島【郡山市】	400,000-

気仙沼市南部の本吉地区に設けられた遊び場「気仙沼あそびばー」は、震災により遊び場を失った子どもが思いきり遊べる場所として地元の住民を中心に運営されています。

今回の助成では、遊び場に集まるお年寄り17名が今後遊び場で作成する手作り品の視察研修として盛岡手作り村を訪問しました。作品づくりのためのお茶会は月2回の予定でしたが、毎日のように集まるお年寄りもあり、お互いに得意な技を教え合ったりするなどして、物づくりを通じた交流と、新たな生きがいがづくりにつながっています。また、遊び場に来ている子どもが、目が良く見えないお年寄りの糸通しを手伝うなど、多世代の交流も生まれています。



東北からのメッセージ

大人の辛い顔だけを見ていた子どもが元気になり、その声を聞いて大人に笑顔が戻りました。そして、おじいちゃんおばあちゃん達も活動を継続させるため立ち上がってくれました。

今、食に欠ける子が居ます。つくだけ炒めて昼食にし、部活に行く中学生。この子達にお腹いっぱいご飯を食べさせたい。これが課題です。

気仙沼あそびばーの会
代表 鈴木 美和子



被災地を訪れる方々に被災体験を伝える語り部ツアー等を実施しています。今回の助成を受け、語り部ガイドの育成を目的とした講習会と研修会を計4回実施しました。震災から5年が経過し、語り部に求められる内容が、震災当時の対応や心境に加えて「現在の気仙沼の現状と未来の気仙沼の姿」を知りたいという方が増えています。また、子どもの訪問も増えているため、分かりやすく伝える話し方なども研修しました。参加した語り部からは「一方的に案内するのではなく、参加者との対話を意識した案内が大切だと分かった」などの感想がありました。



東北からのメッセージ

震災の記憶が風化する中、語り部活動は4年目を迎えました。年々、被災地視察で訪れる方は減少傾向にありますが、修学旅行で訪れる子ども達は増えています。未来を担う若い人の力に期待しています。復興の道のはいまだ険しく前途多難ですが、この若い力を借りて地域が一丸となり、新しい気仙沼を構築してまいります。皆様からのご支援、心より感謝申し上げます。

一般社団法人 気仙沼観光コンベンション協会
事務局次長 臼井 亮



子育てネットあかいわは、児童館を利用する幼児をもつ母親を中心に設立された子育てサークルです。今回の助成で、親子や地域の高齢者を対象に「お手軽パン作り教室」が開かれ、家庭にある身近な道具を使ったパン作りに挑戦し、子どもと一緒に家庭でも作ってみたいと好評でした。また、10月には親子16組が参加して「りんご狩り研修旅行」を実施。りんごをもちで食べたり、外で思いきり遊んだりする機会は普段子育てに向き合う母親にとっても良いリフレッシュの機会になりました。新しくお友達ができたという参加者もいました。

イベントの開催を通じて、母親同士の交流が進み、悩みを共有できるような新しいつながりが生まれました。



東北からのメッセージ

心温まる支縁金を頂き誠にありがとうございました。子どもを取り巻く環境を震災以前のようにしたいと考え、地域の人たちが集まるきっかけ作りのためにイベントを行いました。講師の先生にパン作りやフラワーアレンジメントを教わり、皆笑顔にリフレッシュできました。これからも人の輪を広げ、子どもの成長に良い影響を与えられる支援を行ってまいります。

赤岩児童館 子育てネットあかいわ
平成27年度 会長 熊谷 めぐみ



ムラカミサポートは、主に関東など被災地外の医師や看護師などの医療従事者が、気仙沼市内の仮設住宅の集会所等で開催する医療相談会の現地での調整を担っています。今回の助成を受け、この医療相談会や医療以外の生活面でのサポートを継続することができました。

交通の便の悪い仮設住宅の場合、病院や買い物に行くのも一苦勞です。病院への通院だけで半日かかってしまう場合もあり、病院の受診を控えしまうこともあります。また、通院をした方がいいのか、何科を受診すればよいのかなど、お年寄りひとりでは判断が難しいことも相談会であれば気軽に相談することができます。



東北からのメッセージ

仮設住宅では一人暮らしのお年寄りも多く、健康の気になる方や身体の不自由な方のサポートをはじめ、既存の制度や枠組みでは対応しきれないことなど、問題を掘り起こしながら、必要な支援は何かを常に自問自答しながら寄り添う活動を続けています。昨年は仮設住宅で病院に行けずいた方を医療機関に繋げることができました。活動へのご支援、心から感謝申し上げます。

ムラカミサポート 代表 村上 充



Kesenumama'Sは、気仙沼市内の未就学児の子育て家族15家族が集まって活動しています。10月にパパママ向けの「乳幼児救命救急講習」を開催しました。「震災を経験した気仙沼だからこそ、何があっても慌てずわが子の命を守る知識が欲しかった。」と参加した方が多くいました。この日は、パパママが講習に集中して参加できるよう託児付きで開催し、救命救急の基本的な動作と乳幼児の処置の違いについて学び、参加者には終了証が手渡されました。

講習の他にもツリーハウスでお弁当を食べるイベントや、ベビーマッサージ等を行い、子育て中の母親や父親が知り合い、交流が生まれることで子育ての悩みを相談するネットワークが築かれつつあります。



東北からのメッセージ

過疎に悩む気仙沼において、同じ年齢の子どもをもった家族が意識的に集まることができました。今回の事業を通し、子どもたちのために主体的にまちづくりをしていきたい、そして、新しくママになった女性にも暮らしやすいと思ってもらえるような下地づくりをしたいと思うようになりました。皆さまがわたし達に分けてくださったように、わたしも誰かに幸せを分ける存在でありたいと思います。

子育てネットワーク Kesenumama'S

代表 藤村 さやか



日頃は子どもの自然体験学習や地域づくりの活動を行っている団体ですが、「より地域の人に団体の活動を知ってもらいたい」と大人向けのワークショップを企画、「海とひとにやさしい石鹸作り」のワークショップを5回実施しました。植物性100%の石鹸素地で自分の好きな香りをつけた石鹸を作り、その石鹸を使うことで海や自然について考えるきっかけにしたいという想いのこもったワークショップ。参加者は20代から80代と幅広く、子育て世代から高齢者まで世代を越えて交流する機会となりました。

特に子育て中のお母さんにとっては、家事や子育てに追われている日常から少し離れて、お母さん同士でおしゃべりが出来る良い発散の機会になったようです。



東北からのメッセージ

震災復興が進むなか、海は危険なものと思われ、普段の暮らしで子どもたちが海と関わることはほぼありません。被災地沿岸の復興を行う上で、海のある暮らしは切っても切れない存在です。活動を通して、子どもたちを育む保護者らと、海は怖いだけでなく魅力的な物であること、そして次世代にきちんと海や自然の暮らしを伝えなければならないことを語りました。

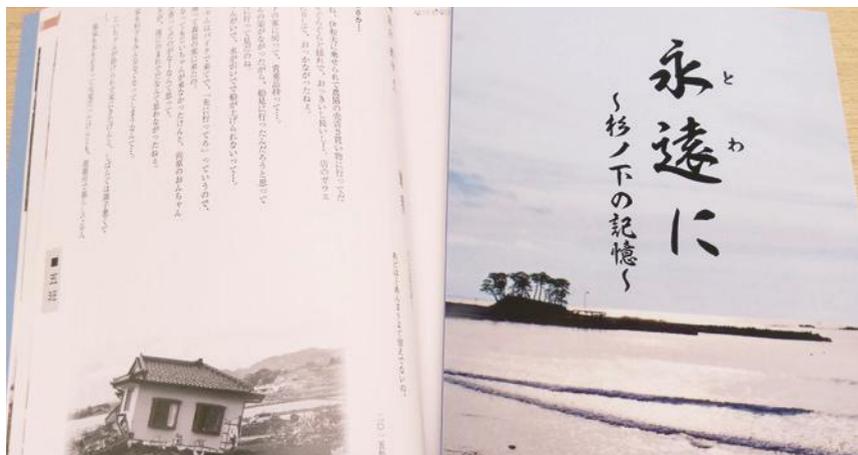
特定非営利活動法人 浜わらす

代表理事 笠原 一城



気仙沼市杉の下地区は、津波により全85世帯が被災し、住民312人中93人が津波の犠牲になりました。時間の経過と共に震災の記憶が風化していく中で、震災以前の様子と被災体験を後世に残そうと記録誌を作成しました。

作成にあたっては、震災体験の座談会や対面での聞き取り、文章での寄稿など様々な形で当時の記憶を辿ることになりました。辛い経験を思い出したくないと言っていた方も、震災の経験が将来の「防災」の一助になるなら聞き取りに応じて下さり、最終的に65人の方から協力を得ることが出来ました。震災前の暮らしに戻ることは出来なくとも、改めて地区の住民のつながりを感じ、今後の生活の励みとなりました。



東北からのメッセージ

震災を語り継ぐことにより災害への教訓と啓発・風化防止の一助になればと、大津波で流出した地区の「記録誌」を作成しました。津波で懐かしい景色は失われ、共に生きた地区の方々はバラバラになりましたが、なくなってしまったふるさとを「形」に遺すことが出来ました。本当に有難うございました。地福寺は我々遺族の菩提寺でもあります。また、出開帳では娘の属する太鼓団体が虎舞を披露させて頂き、大変お世話になりました。

東日本大震災杉の下遺族会 小野寺 敬子



震災前より自死遺族へのグリーンサポートや当事者同士の分かち合いの会を実施してきました。震災後は、因らずも生と死に向き合わざるを得なくなった子どもや教員が多いことから、学校関係者向けの講座を継続して実施しています。今回の助成を受け、生と死を学ぶ講座を仙台市内で2回開催しました。教育関係者や元教員、そしてこれから教員を目指す学生など2回で46人が参加しました。講座では、宮城県内の学校で取り組まれている「命の授業」の事例について紹介があり、事例を踏まえて改めて授業のあり方を考えました。喪失感を抱えた子どもにどのように生と死を伝えていくのか、専門的な支援を続けていきます。



東北からのメッセージ

活動で最も重要なものは、大切な人を亡くされた方がご自分の様々な感情を安心してお話できる場「わかちあいの会」の継続的な運営です。亡くなった人と遺された人との関係性は切れる事はありません。その関係性を大切にすることがグリーンケアであると考えています。全ての命には限りがあり、グリーンケアはいつでもどこでも必要です。従って、わかちあいの会をいつまでも続けていく事が大切であると考えています。

特定非営利活動法人 仙台グリーンケア研究会理事長 滑川 明男



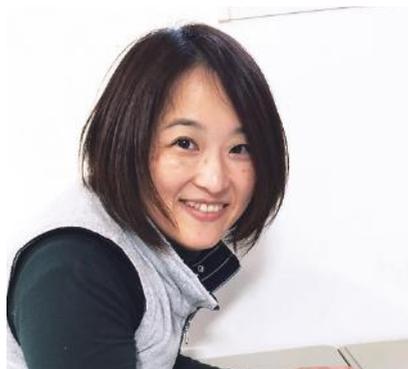
南三陸町で障がいを持つ子どもへの支援として放課後デイサービスを実施しています。利用している子どもが将来自立して生活を送ることができるよう、親と離れて自分が希望する場所を訪問する1泊2日の実習で東京を訪問しました。電車の切符の買い方や乗り方、施設内での立ち振る舞い、外食など南三陸町では経験できない社会経験を積むことが出来ました。人の多いところ、初めての場所、しっかり決められていないスケジュールなど、子どもにとっては苦手なことばかりでしたが、挑戦し成し遂げられたことで自信になり、「来年はどこへ行こうかな」という次への意欲につながりました。保護者にとっても子どもが地域の中で暮らすために必要なことを考えるきっかけとなりました。



東北からのメッセージ

震災から5年が経ちましたが、南三陸町ではまだまだ平穏時にはほど遠い状況ですが、何もかも失われたと脱力したあの虚無感を思えば、確実に日常へ向かって進んでいます。私達の安定した活動が、地域全体の幸せな生活に繋がると信じて、様々な方法を模索しながら一日一日を大切に取り組んでいきたいと思えます。これからもご支援をよろしくお願います。

特定非営利活動法人 奏海の杜
事務局長 太齋 京子



暮らしの中のトラブルを解決・回避するための知識やより良い人間関係をつくるためのアイデアをお話する講座を計7回開催しました。震災から5年が経過し、仮設住宅から災害公営住宅などへの移転が進んだことで、新しいコミュニティでの生活が始まっています。講座では、専門職でなくとも、隣人同士で暮らしの中のトラブルや行き場のない不安を抱える人が発するSOSに気づき、対応するためのノウハウが伝えられました。悩みや苦しみを抱えている当事者の方や家族や知り合いを心配する方、支援団体の方など様々な参加者がおり、みなさん熱心に講座に耳を傾けていました。



東北からのメッセージ

当団体は悩みごとや困りごとの駆け込み寺です。被災地で家庭内の問題や近所づきあいの課題を解決するための講座を行いました。何より心に残っているのは、講座の終了後、参加者同士が自主的にお互いの悩み相談に耳を傾けてアドバイスしていたことです。活動の成果をその場で実感しました。活動をする機会を与えて頂き、本当にありがとうございました。

公益社団法人 日本駆け込み寺 仙台支部
支部長 中島 一茂



仙台市内の児童養護施設の子ども 33 人が石巻市網地島での 2 泊 3 日の体験交流活動に参加しました。人口減少が進み、今は子どもが 1 人もいなくなってしまう網地島のお年寄りたちにとっては、子どもたちの訪問と交流は一時的にでも島が明るくなる生きがいのような機会になっています。様々な事情により施設で暮らす子どもにとっても、網地島の住民は田舎のおじいちゃんおばあちゃんのような存在。島の住民が先生になって、網地島にしかない「あなご抜き」と言われる魚釣りに挑戦。美味しいお刺身にご飯を何杯もおかわりする子どもが沢山いました。施設では得られない自然体験と島での家庭的な生活はかけがえのない思い出になりました。



東北からのメッセージ

高齢者しかいない島に、子どもたちの明るい歓声と笑顔がもたらされました。何もない島ですが、島や海の体験を楽しんでくれたようです。島民も子どもたちから元気をいただきました。皆様からいただきました御恩を大切に、今後も、児童養護施設の子どもたちを島に招き、交流を続けていきます。ありがとうございました。

網地島ふるさと楽好 楽好長 桶谷 敦



南三陸町で小さな子どもをもつ母親が中心となり、親子対象の季節ごとのイベントやミシン講座などのサークル活動を 15 回開催しました。結婚や転勤で新しい土地に住み始めた母親の中には子育ての不安を一人で抱え込んでしまう人も少なくありません。もこもこでは、子どもと一緒に参加出来るイベントや母親自身がやってみたいこと応援するイベントを行いました。イベントは、母親がリフレッシュする機会になったり、子育ての不安や困りごとを先輩ママに相談したり、子育てに関する情報交換をする機会になっています。参加者からは、「ママ友がいなかったのでサークルの存在が大きい」「気持ちに余裕を持つことができた」などの感想が寄せられています。



東北からのメッセージ

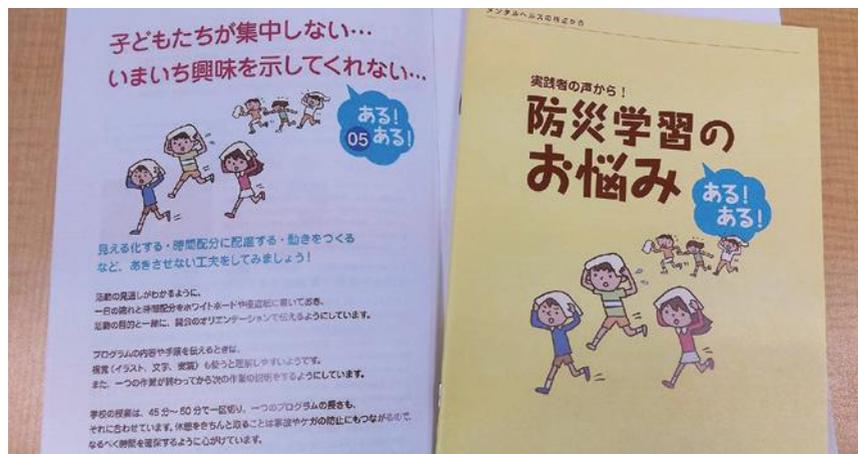
この度のご支援により、ハロウィンパレードやクリスマス会、フリーマーケットなどのイベントを開催することができました。ママ達子ども達の笑顔に花が咲きました。東日本大震災から 5 年、未だ育児環境は困難なことばかりです。そのためママサークルでの活動で被災地での子育て支援を今後も継続していきたいです。

南三陸ママサークル もこもこ 代表 高橋 志保



宮城県内各地で防災学習の推進に取り組んできた経験をいかし、防災学習プログラムの企画や実施方法についてまとめた実践者向けの冊子を作成しました。作成にあたっては検討会を7回開催、「被災経験のある子どもが安心して防災学習に取り組めるように」と、子どもの心に配慮したプログラムづくりを行いました。また、防災学習を行う実践者も被災経験を持っていることから、子どもと実践者双方が安心して取り組むことのできる防災学習という視点で検討が進められました。

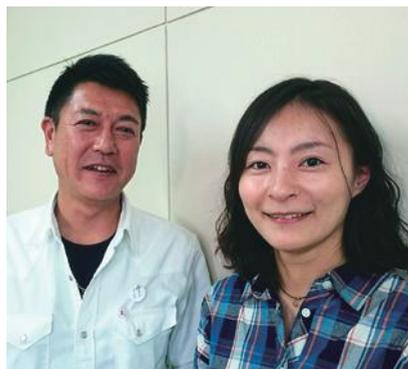
完成した冊子は実践者向けに配布され、冊子を活用した防災ワークショップの開催なども予定されており、防災を楽しみながら身近なものとして学ぶ方法が広がっていくことが期待されます。



東北からのメッセージ

本事業にお力添えいただきましたことに心より感謝申し上げます。作成に携わった方々からは「これまで取り組んできた防災学習を見直す良い機会になった」「メンタルヘルスの専門家にも普及を図りたい」といった声をいただいております。今回得られた知見を活かして勉強会の開催や防災学習ツールの開発等、より一層の普及啓発に取り組んでまいります。

一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン
代表理事 兼原 英文
宮城事務局／福祉・防災学習コーディネーター 菅原 清香



今回の助成を受け、自閉症・発達障がいのある子どもの保護者を対象におしゃべりサロンを15回開催しました。子どもの年代別に対象者を分け、近い年代の子どもの保護者同士が集まり、自分の経験や子どもへの接し方での悩みを共有することができました。専門家を招いたサロンも2回開催され、日頃の接し方に加えて、震災など緊急時の対応を学ぶ機会も設けられました。

子どもの障がいを周囲に明かせずに孤立してしまうことも少なくありません。同じ境遇の保護者が集まることで、子どもの特徴ひとつにも「うちの子もそういうところがある」とお互いうなづく様子に安心して話せる雰囲気が生まれ、気持ちを通じ合う時間となりました。



東北からのメッセージ

ご支援を頂きまして、おしゃべりサロンの活動を行うことができました。心よりお礼を申し上げます。東日本大震災から5年、未曾有の体験から当たり前の営みが送れるようになりつつある今、心を寄せ合い支え合うおしゃべりサロンは、ご家族を支える大切な場となりました。皆様から寄せて頂きましたお心とともに、これからも充実した活動を継続して参ります。

認定特定非営利活動法人 みやぎ発達障害サポートネット
代表理事 相馬 潤子



仙台市内の卸町5丁目公園仮設住宅の集会所にて毎月1回お茶っこサロンを開催しました。2013年にサロンを始めた時には100世帯が暮らしていた団地も2015年12月には30世帯を下回り、住民同士の行き来も減っていましたが、月1回続けられるお茶っこサロンを楽しみに集会所を訪れる人は毎回15名前後にものぼりました。また、かつて仮設住宅に住んでいた方などにも声をかけ、温泉への日帰りのリフレッシュツアーを実施しました。移動時間や食事の時間も楽しいおしゃべりは途切れることはありませんでした。仮設住宅は5月末で閉鎖、その後は住まいもバラバラになってしまいますが、その前に5年間ともに暮らした住民同士が集まることができました。



東北からのメッセージ

仮設住まいの高齢の方が人と出会い、おしゃべりして、支え支えられながら元気になる姿を目の当たりにしてきました。私達も年齢の高さではひげをとりません(笑)が、こうした働きを物心両面から支えていただき、心からお礼を申し上げます。このご縁で訪れた地福寺では、片山住職から震災当時の様子や復興について学び、私達の支援に生かす機会を頂きました。ご縁にあらためて感謝して。

一般財団法人 仙台YWCA

代表理事 伊藤 香美子



両親との死別や親などからの虐待により未成年後見人を必要とするケースが増加しています。未成年後見活動は一般的にあまり知られていませんが、子どもの権利を守るためには極めて重要な活動であるため、この活動を推進する仕組みづくりに取り組みました。

先進事例である岡山の(特活)未成年後見支援センターを視察し、岡山のように法人が未成年後見人に選出される事例は画期的である一方、宮城での実現には地域状況から難しさがあることも分かりました。視察後の検討会を経て、子ども支援に携わる支援者を特に法律面からサポートするCLT(こどもサポート・リーガル・チーム)を設立し、子どもが安心して暮らせる社会に向けた取り組みを進めています。



東北からのメッセージ

震災で親を失ったこどもや震災の影響により虐待等を受けたこどもの未成年後見人になった弁護士らと、未成年後見に法人として取り組む岡山市を視察し、こども支援団体等に法律的なアドバイスをするCLTという団体を設立しました。これも一重に本基金によるものと感謝申し上げます。今後も被災地のこどもたちの笑顔のために頑張ります。

特定非営利活動法人ワンファミリー仙台

理事長 立岡 学



大切な人を亡くした子どもとその保護者を対象に、福島市で月1回「グリーフプログラム」開催しました。グリーフは喪失体験から生まれる愛憎や悲しみなど様々な感情のこと。プログラムでは子どもの感情に寄り添い、グリーフの表現をサポートしています。

ほぼ毎月参加する子どももいました。子どもがサポートを受けている間、保護者には別室で対応、保護者の抱える辛さや悩みに寄り添うことで「外に目を向けることが出来るようになった」方もいました。グリーフに関わる人材を育成する養成講座も開催、受講後、参加者8名のうち6名がボランティアとして活躍しています。個別相談や支援が必要な家庭の紹介もあり、活動が着実に必要な人へ届き始めています。



東北からのメッセージ

福島に暮らす死別を経験した子どもへグリーフサポートを届けることが出来ました。震災や死別など喪失を経験した出来事は過去になっていきますが、気持ちや心は現在進行形で様々な影響を受け続けます。喪失体験をした子どもへのサポートに関心を持ち続けて頂くことが彼らのチカラになります。引き続き、子ども達へあたたかな眼差しを向けて頂ければと思います。

特定非営利活動法人 子どもグリーフサポートステーション
事務局長 相澤 治



郡山市で毎月2回子育て広場を開催しました。子どもがおやつを食べている時間を利用し、発達心理の専門家による相談も行いました。内容は、オムツのはずし方や歯みがきなど参加している母親が実際に困っていることが中心。参加者のほとんどが核家族・第一子子育て中の母親で、初めての子育てに不安や戸惑いを抱えながらも子育てに追われている状況でした。広場で聞いたことを早速実践し、「うまくできました」と喜びの報告もありました。

子どもを遊ばせるだけではなく、子育ての不安を気軽に相談でき、母親同士で情報交換ができる子育て広場は、慣れない子育てに奮闘する母親にとってかけがえのない不安の解消の場となっています。



東北からのメッセージ

震災・原発事故から5年が過ぎましたが、未だに福島に住む親子は様々な悩みを抱えたまま生活をしております。今回、御寄付を頂き支援活動ができたことで、たくさんの親子に笑顔を取り戻すことができました。本当にありがとうございました。これからも、福島に笑顔の輪を広げられるように頑張って支援を続けてまいりたいと思います。

特定非営利活動法人 しんぐるまざあず・ふぉーらむ・福島
理事長 遠野 馨



地域創造基金さなぶりとは

地域の多様な課題解決のために必要な資金や情報などの資源を仲介することで、東北の復興と地域の活性化を支える東北発のコミュニティ財団です。

地福寺出開帳 両国回向院 復幸支縁基金 報告書

発行 両国回向院

発行日 2016年6月

基金事務局

公益財団法人地域創造基金さなぶり

〒980-0804 宮城県仙台市青葉区大町 1-2-23 桜大町ビル 303

TEL: 022-748-7283 E-mail: info@sanaburifund.org